

テーマ	要約7. ポストコロナ時代の郊外生活圏形成に関する研究
代表研究者	東京都市大学都市生活学部 林 和眞
研究目的	本研究は、郊外地域新百合ヶ丘におけるCovid-19流行後の生活様式の変化と今後の街づくりに向けたビジョンと都市機能に関するニーズについて明らかにすることを目的とする。
研究方法	麻生区の住民向けのWebアンケート調査と分析を行った。調査した地域住民の特徴は、地域住民の世帯所得が全体的に東京都市圏や川崎市の平均収入の状況より上位層が多い。多くがホワイトカラーであり、共働き世帯やカップルの割合も高かく、職場は、主に東京23区であり、主な通勤手段は公共交通手段という典型的な新百合ヶ丘住民であった。
主要な研究結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の変化: 全体的に変わらないと答えた人が多い中で、生活空間は悪くなったと答えた人の比率がかなり多く、住宅空間などに関する変化を問題と感じている人が多い。健康状態、労働環境、家庭環境については、通勤の減少などにより2割近くが良くなったと答えて入る。</li> <li>・テレワーク: テレワーク有は54.1%、半数以上はほぼ毎日か週2-3回ほどテレワークを実施し、長期的に続くと考える。実施率は、全国と首都圏平均と比較して著しく高い。</li> <li>・時間の使い方: 平日は仕事時間の減少のほか、家庭時間(家出の用事・家族などの世話)と余暇に対する時間が増加し、休日は家庭時間の増加に加えて仕事に対する時間も増加。</li> <li>・日常の行動: 子供との遊びは自宅周辺徒歩10分圏内が増え、食料品・日用品の買い物は自宅から離れた近隣中心地が増えた。</li> <li>・郊外生活圏に関する3つのモデル: 自律生活圏についての共感度が最も高い。テレワークをする人ほど自律生活圏へのニーズが高い。</li> <li>・地域が目指す街ビジョン: 第1が「治安が良く安全な街」、第2が「歩いて楽しい街」で、それ以外では、【医療関係】と【商業施設】に関するビジョンや、自然に触れあう機会が多く緑が豊かな街と商店街が元気な街を求めている。 テレワークにより趣味や家事、子育てや運動の時間や適度に気分転換できる環境を求めようになる。ライフスタイルの変化に合わせた都市空間づくりを行う必要がある。</li> </ul>